

片岡王寺跡第2次
舟戸・西岡遺跡第4次
—2004年度発掘調査報告書—

2007. 3

王寺町教育委員会

片岡王寺跡第2次
舟戸・西岡遺跡第4次
—2004年度発掘調査報告書—

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第7集を発刊することとなりました。

本書には、2004年度に実施した片岡王寺跡第2次、舟戸・西岡遺跡第4次の発掘調査の成果を報告しています。

片岡王寺跡は7世紀に創建された古代寺院の遺跡として、また舟戸・西岡遺跡は弥生時代の高地性集落として王寺町にとって重要な遺跡です。

片岡王寺は、現在の町名の由来にもなっていると考えられる寺院で、そのような寺院が飛鳥時代以来、どのような伽藍をもち、王寺の地にそびえ立っていたのか、大変興味が引かれるところあります。舟戸・西岡遺跡は片岡王寺よりもさらに古い弥生時代から、ここ王寺町で人々が生活を営んでいたことを教えてくれ、とくに遺跡の北を流れる大和川を通じた交通路との関係が注目され、「交通の町」といわれる王寺町の淵源も示唆してくれています。

両遺跡とも、いまだその姿をはっきりとうかがい知ることができません。今後も機会を得て、遺跡の実態の把握に努め、保存と活用を図りたいと存じます。

最後になりましたが、奈良県教育委員会をはじめ、それぞれの調査におきましてお世話になりました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

王寺町教育委員会
教育長 北 義次

例　　言

1. 本書は、2004年度に王寺町教育委員会が実施した片岡王寺跡第2次・舟戸・西岡遺跡第4次の発掘調査について報告したものである。
2. 各調査の調査地および調査期間、調査面積などは巻末の報告書抄録に示したとおりである。
3. 各調査は次の体制で実施した。

調査主体	王寺町教育委員会
教育長	金森利匡（～2006.1）、同 北義次（2006.3～）、教育次長 中井康員
	社会教育課長 藤山雅章、同係長 白石良文
調査担当者	王寺町教育委員会 社会教育課 主事 岡島永昌、同 臨時職員 櫻井恵
整理補助員	古賀萬代（王寺町シルバー人材センター）
発掘作業	安西工業株式会社に委託
重機掘削	株式会社泰山組に委託（片岡王寺跡第2次）
調査協力・助言	文化庁、奈良県教育委員会事務局、鈴木裕明、廣岡孝信、吉村公男
4. 本書で使用している座標数値は世界測地系に基づくもので、水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）に基づくものである。
5. 図2は国土地理院発行の1/25,000地形図「信貴山」（平成13年7月1日発行）、「大和高田」（平成14年4月1日発行）及び「奈良県遺跡地図」（平成10年3月）をもとに作成した。図3は王寺町発行の「王寺町都市計画図（3）」（1/2,500、平成16年修正）をもとに作成した。図7は河合町発行の「河合町全図1」（1/2,500、平成4年修正）をもとに作成した。
6. 土層の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖23版」に掲った。
7. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。
8. 本書は、第1章を岡島永昌が、第2章・第3章を櫻井恵が執筆し、岡島・櫻井が編集した。

本文目次

第1章 調査地の歴史的環境	1
第2章 片岡王寺跡第2次発掘調査	3
第3章 舟戸・西岡遺跡第4次発掘調査	10

挿図目次

第1章 調査地の歴史的環境	図5 SK 1出土遺物実測図 (1/4・1/6)
図1 王寺町の位置	図6 出土遺物実測図 (1/4)
図2 調査位置と周辺の遺跡 (1/25,000)	第3章 舟戸・西岡遺跡第4次発掘調査
第2章 片岡王寺跡第2次発掘調査	図7 調査位置図 (1/5,000)
図3 調査位置図 (1/2,500)	図8 各トレンチ平面図・土層断面図 (1/80)
図4 遺構平面図・土層断面図 (1/100)	

写真図版目次

写真図版1 片岡王寺跡第2次	写真図版4 舟戸・西岡遺跡第4次
B区SK1完掘状況（西から）	1 トレンチ東壁土層断面（西から）
D区遺構検出状況（東から）	2 トレンチ地山検出状況（南西から）
E区遺構完掘状況（西から）	5 トレンチ地山検出状況（東から）
F・G区遺構完掘状況（西から）	6 トレンチ東壁土層断面（西から）
写真図版2 片岡王寺跡第2次	3 トレンチ北西壁土層断面（南東から）
出土遺物	4 トレンチ南壁土層断面（北から）
写真図版3 片岡王寺跡第2次	7 トレンチ東壁土層断面（西から）
出土遺物	

第1章 調査地の歴史的環境



図1 王寺町の位置

という特性をもつてゐるため、歴史的に水路として利用されてきた。近世には剣先船・魚梁船と呼ばれる川船が就航していたことは明らかであるが、古くは推古天皇16年(608)に隋使裴世清が飛鳥に赴く折にも大和川が利用されたと考えられている。なかでも、王寺町は奈良盆地の諸河川を集め、かつ大阪府側に出る位置にあり、水路の喉嚨部にあたる重要な地域である。

王寺町の遺跡において、舟戸・西岡遺跡(14)は大和川との関係に注意すべき遺跡である。この遺跡は、大和川の南に隣接し、舟戸山と通称される丘陵上に位置しており、第1次調査において弥生後期の竪穴住居址の一部が検出されている。付近には弥生土器が散布していることから、丘陵上には高地性集落が広がっているものと見られ、大和川と集落との何らかの関わりが想定されている。また、舟戸・西岡遺跡は、王寺町舟戸から河合町大輪田にかけて存在する遺跡であり、河合町側にあたる丘陵東斜面上では第2次調査において掘立柱建物が検出されている。丘陵東斜面は、大和川はもちろん奈良盆地全体が広く見渡せる眺望の良い場所である。

一方、王寺町には大和川を通じた水路だけでなく陸路も存在する。近世には南北に当麻街道が、東西に大阪街道が存在した。当麻街道は、現在は聖徳太子葬送の道とも呼ばれているが、実際に太子の葬送があった道であるかどうかの正否はともかく、沿道には達磨寺(19)や片岡王寺跡(20)が存在することから、古代においても近辺に街道が存在したと考えられる。達磨寺は、「日本書紀」推古天皇21年(613)条に記される聖徳太子と飢人による話を由縁とし、飢人が達磨大師の化身とされ、達磨寺3号墳が達磨大師の廟とされて鎌倉期に成立した寺院である。平成14年(2002)には寺院成立期のものと見られる石製宝篋印塔、土師質合子、水晶製五輪塔形舍利容器、舍利が本堂基壇の小石室から出土した。片岡王寺跡(20)は、7世紀前半に敏達天皇系王族によって創建された寺院遺跡で、現在の王寺町立王寺小学校校舎が建てられている部分には明治20年(1887)頃までは基壇や礎石が残っていたといい、石田茂作氏・保井芳太郎氏によって南向きの四天王寺式伽藍配置が想定されている。

本書では、王寺町教育委員会が町内において2004年度に実施した2件の発掘調査を報告している。各調査の内容を報告するにあたって、まずは調査地の歴史的な環境について若干触れておきたい。

王寺町は、奈良県北葛城郡に所在し、奈良県の北西部、奈良盆地の西部に位置する。北に奈良県生駒郡三郷町・斑鳩町、東に奈良県北葛城郡河合町・上牧町、南に奈良県香芝市、そして西に大阪府柏原市が隣接している。

王寺町の歴史的環境とのかかわりにおいてとりわけ重要なのは、町の北端を流れる大和川である。大和川の源流は初瀬川で、奈良盆地の南東部に端を発している。そこから奈良盆地をほぼ横断するようなかたちで佐保川、寺川、飛鳥川、曾我川、富雄川、竜田川、葛下川の川水を集めながら西流し、亀の瀬の峡谷を抜けて奈良盆地を越え、大阪府側へと流れ出る。そこから現在はそのまま西流して大阪府堺市で大阪湾に注いでいるが、近世に大和川が付け替えられたまでは石川との合流点付近から恩智川などの枝川をなして西北に流れ、淀川に合流していた。

このように、大和川は奈良盆地内部と大阪湾岸部を結ぶ



- 1 今池瓦窯 2 辻ノ垣内瓦窯跡 3 峯ノ阪遺跡 4 峯ノ阪古墳 5 上ノ御所瓦窯 6 勢野茶臼山古墳 7 平隆寺跡
 8 立野城跡 9 久度遺跡 10 立野遺跡 11 久度南遺跡 12 神南古墳群 13 神南遺跡 14 舟戸・西岡遺跡 15 西安寺跡
 16 西安寺瓦窯跡 17 岩才池北古墳 18 達磨寺古墳群 19 達磨寺 20 片岡王寺跡 21 片丘馬板塚（孝靈天皇陵）
 22 寺院跡？ 23 墓井瀧ノ北遺跡 24 島田城跡 25 片岡城跡 26 島田古墳 27 尼寺北高寺 28 尼寺房寺南遺跡
 29 平野窯跡群 30 平野窯穴山古墳 31 平野古墳群 32 送迎山城跡 33 下牧瓦窯跡

図2 調査位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

第2章 片岡王寺跡第2次発掘調査

1 調査の契機と経過

本章に報告するのは、王寺町本町2丁目6番16号に所在する王寺町立王寺小学校のグランド整備工事に伴う発掘調査の成果である。今回の調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地にはあたっていないが、国道168号線をはさんだ東側には達磨寺、南西側には同小学校校舎付近を中心伽藍とする片岡王寺跡の埋蔵文化財包蔵地が存在する。今回の調査地の周辺では近年、国道168号線拡幅工事に伴う発掘調査などがおこなわれている。片岡王寺跡第1次調査では片岡王寺中心伽藍の東面・北面を取り囲むと思われる奈良時代の石積みの溝とそれに伴う掘立柱跡、掘立柱建物の遺構が確認されている。また、平城宮大極殿と同様の鬼面文鬼瓦が出土し、片岡王寺と平城宮との関係をうかがわせる。その後実施された片岡王寺跡第3・4次調査でも古代の掘立柱建物および柱穴群が発見さ

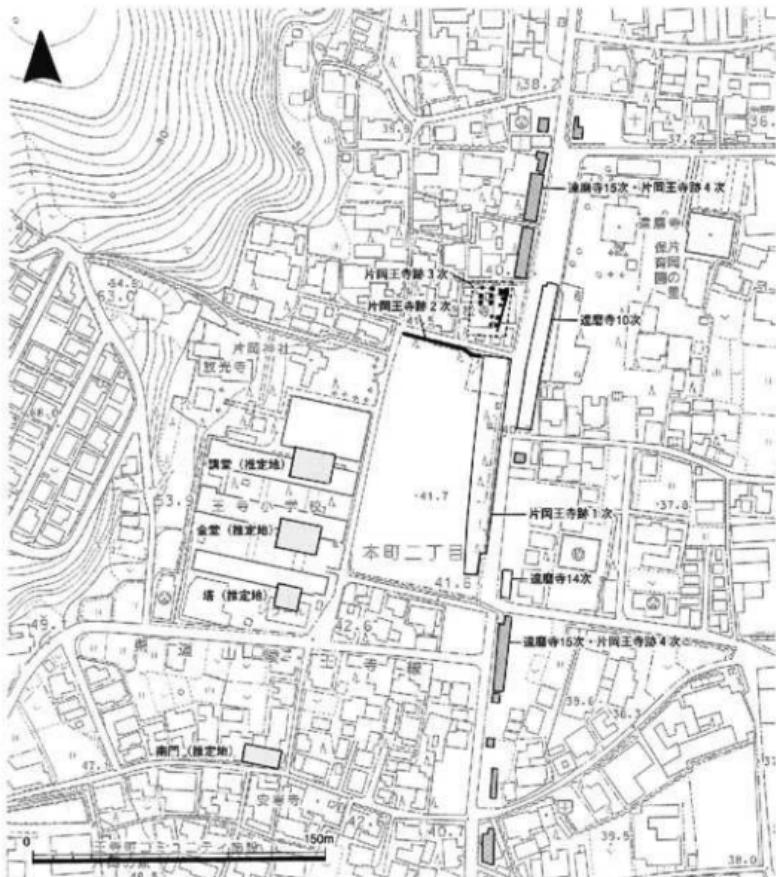


図3 調査位置図(1/2,500)

れ、これらの遺構は正安4年（1302）に蕃盛が撰述した『放光寺古今縁起』に記載される片岡王寺の関連施設の遺構と推定でき、片岡王寺跡は現在の埋蔵文化財包蔵地の範囲を超えて広がることがわかってきてている。

今回の調査原因となった王寺小学校グランドの改修工事は、グランドの東側と北側で擁壁と防球ネットを、西側で排水溝を新設するものである。このうち東側は国道168号線拡幅工事に伴って片岡王寺跡第1次として調査を終えていたこと、西側は小規模な掘削であることから、残る北側を調査の対象とした。7月22日の掘削作業に立ち会い、多くの遺構が存在する状況を確認したので、工事者と交渉し、工事の掘削が及ぶ範囲での調査を翌23日から4日間おこなった。

2 調査の内容

調査区は南北幅約15m、東西長約45mで、擁壁・防球ネットの設計にしたがっているために一部屈曲している。面積は約675m²である。調査区内には擾乱が点在しており、その擾乱を目印に西からA～G区を設定した。

（1）層序

層序は上層から近現代整地土、近世整地土、中世整地土、地山である。近現代整地土は調査区全体に堆積している。地山は調査区の西から東へ向かって低くなっているが、B・C区において幅4.2m、高さ40～60cmの高まりとなって近現代整地上の直下で検出された。この高まりの影響であるのかその西側では中世整地土が、東側では近世整地土と数次の中世整地土が堆積するという違いが認められた。

近現代整地土　調査区全体に堆積する暗褐色シルト質（厚さ70～80cm）とA～C区に堆積する暗灰黄色シルト、オリーブ褐色粘質土（厚さ25～40cm）である。

近世整地土　C区以東に堆積する暗灰黄色粘質土、灰色粘質土などからなり、地山ブロックが含まれる部分もある（厚さ40～50cm）。古代～近世瓦、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器などが出土している。

中世整地土　高まりの西側のA区には暗灰黄色砂質土、灰色粘質土、灰色粘土などが堆積している（厚さ40～50cm）。これらの層からは古代瓦、中世瓦、壇、須恵器、土師器（中世皿・土釜）、瓦質土器、瓦質土管が出土した。高まりの東側には数次の整地土が堆積している。最も新しいのは中世整地土aで、F～G区にオリーブ褐色・暗灰黄色・黄褐色粘質土が堆積し、東へいくほどより厚くなりその厚さは約40cmを測る。その下層には中世整地土bがあり、E～G区に灰オリーブ色・黄灰色粘質土が堆積している（厚さ10～20cm）。この層からは古代瓦、土師器に加え、13世紀中葉～末の瓦器類の破片が出土している。中世整地土bの下層には中世整地土cがあり、E区以東に褐色粘質土が堆積している。中世整地土cに含まれる遺物は確認していないが遺構の年代から中世のものと推定する。

地 山　調査区西端では灰オリーブ色シルト質～粘土で、検出面の標高は40.7mである。地山は東へ向かって緩やかに低くなり、黄褐色粘質土に変化していく。その間、B・C区で地山は高まりになっており、その上面の標高は40.9mである。この地山の高まりが自然地形であるのか人為的に削り出されたものであるのかは判断することができなかった。高まりの東側では地山はさらに東へ低くなり、E区西端の標高40.3mで遺構検出面より下層の堆積となっている。

（2）遺構と遺物

遺構の検出はA～D区では地山上面、E～G区では中世整地土cの上面でおこなった。ただし、E～G区で検出した遺構の中にはトレンチ断面にかかる遺構によって中世整地土bから形成されたものもあることがわかっている。以下、A～G区の地区ごとに遺構と遺物について述べる。

A 区 遺構は認められなかった。

B 区 S K 1は擾乱で肩が壊れているため平面形は不明で、深さは約38cmである。埋土は上から暗灰黄色粘質土、オリーブ灰色砂質土、灰色砂質土が堆積しており、瓦、壇、須恵器、土師器、瓦器が出土している。

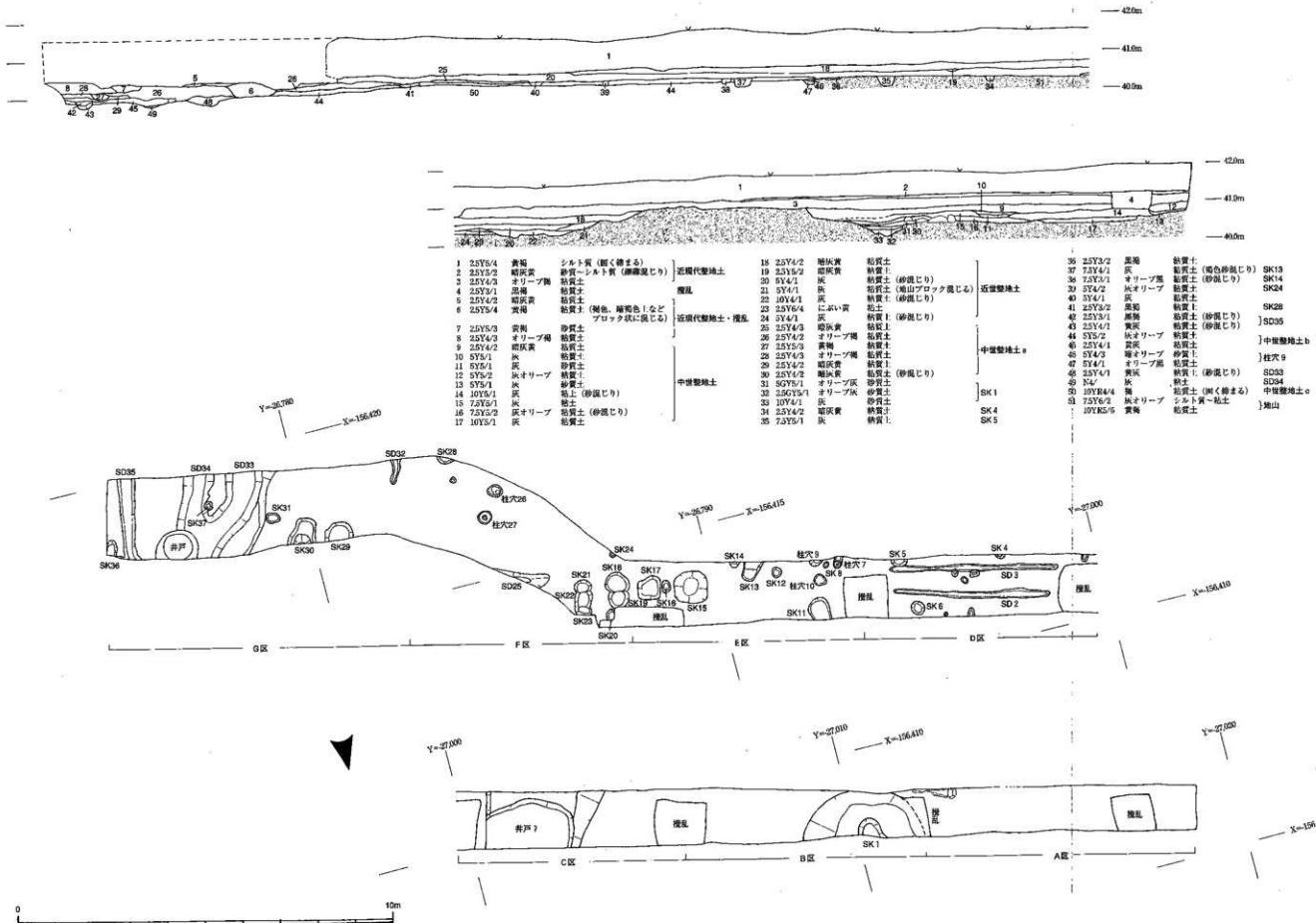


図4 遺構平面図・土層断面図 (1/100)

平瓦は繩叩き、格子叩きを施したものが大勢を占め、わずかではあるが離れ砂を使用したものもある。丸瓦は行基・玉縁丸瓦ともにある。出土した瓦はコンテナ11箱（数点の壙を含む）、土器類はコンテナ1箱を数え、土器類では瓦器片が多く見られた。遺物の出土状況から、この土坑は廃棄を目的としたと考えられる。

1は灰色で高台をもつ須恵器底部、2はオリーブ灰色で平底の須恵器底部である。3～8は瓦器碗である。3の脇部外面は隙間の多いヘラミガキ、脇部内面は密なヘラミガキ、見込みはジグザグ暗文である。4の脇部外面はわずかなヘラミガキ、脇部内面はやや隙間のあるヘラミガキ、見込みは4輪程度の連結輪状暗文で、高台はやや外傾し厚みがある。5は4とほぼ同様であるが、器高が低く高台が断面三角形となっている。6の脇部外面には指圧の調整痕が残っており、脇部内面はヘラミガキ、見込みは連結輪状暗文で、高台は断面三角形。器高は低い。7・8は底部だけが残存している。ともに断面三角形の高台をもち、見込みに7は2輪、8は9輪の連結輪状暗文が施されている。これらの瓦器碗は川越編年II-AからIII-Aまでの時期幅をもつ。9～11は土師器皿である。12・13は菅原編年大和B1型の土師器土釜である。口縁を「く」の字に外反させて口縁端部を内側に折り返し、肩部上方に水平の鈎をもっている。12世紀後半～13世紀のものであろう。14は均整唐草文軒平瓦である。色調は灰色を呈し、胎土は密で日立った砂粒を含まない。瓦当面の一部しか残存しておらず、平瓦との接合部分で剥離している。15は丸瓦の脇部で色調は灰色、硬質で焼き上がりしている。凸面は繩叩きのあとで消し。凹面には布袋を綴じ合わせた部分の圧痕があり、縦5本/cm・横6本/cmの粗い目のものと、縦10本/cm・横8本/cmの細かい目の布が綴じ合わされていることがわかる。16は玉縁丸瓦の玉縁部と脇部の一部が残存するもので、色調は灰白色、焼成はやや軟質である。この丸瓦はまず脇部から玉縁の部分までを一体につくり、その後肩部に粘土を貼り付けて成形されている。凸面は繩叩きのあとで消し。凹面には縦9本/cm・横8本/cmの布圧痕があり、側面は分割時の破断面が未調整のまま残っている。17・18は平瓦である。17は色調が黄褐色で、焼成は軟質である。凸面は繩叩き、凹面には縦5本/cm・横6本/cmの布圧痕があり、縦方向のなのうち、狭縫に沿って3.5cmの幅で横方向のなでが施されている。18は色調が青灰色、焼成は硬質である。凸面は斜格子叩き、凹面には粘土截断時の糸切り痕と縦横8本/cmの布圧痕がある。SK1から出土した遺物を検討すると、瓦に関しては古代のものがほとんどであるが、川越編年III-Aにあたる瓦器碗を含むことから、遺構の時期としては12世紀後葉～13世紀中葉である。

C 区 井戸と思われる遺構を確認したが、トレンチ断面を観察した結果、近世の時期のものとみられたので掘削はおこなわなかった。

D 区 素掘り溝、土坑を検出した。SD2・3は並行して東西方向に伸びる素掘り溝である。SD2からは土師器片、瓦器片が出土するが、SD3からは土師器片、染付の磁器片が出土していることから、近世の素掘り溝といえる。SK4はトレンチの壁際で検出した。東西幅26cm、深さ14cm。瓦、土師器、瓦器が出土しており、中世の遺構であるが時期は特定できない。

E 区 土坑、柱穴を検出した。柱穴7は円形で柱芯の深さは17cm。埋土は暗灰色砂質土。土師器の破片が出土した。SK13は東西幅50cm、南北幅は検出された分で50cm、深さは23cmである。埋土は灰色粘質土で褐色の砂が混じる。古代瓦、土師器片、土釜、瓦器碗（19）が出土している。19の瓦器碗は川越編年III-Cにあたるものである。外面は口縁部のみのヘラミガキ、内面は同心円暗文で、高台は断面三角形である。SK15は隅丸方形で東西幅90cm、南北幅82cm、深さ38cmである。古代瓦、瓦器片、土師器皿（20）、瓦質の擂鉢が出土している。

F 区 柱穴、溝状遺構、土坑を検出した。柱穴はE区と合わせて5基を検出したが、開通をもつものはなかった。SD25は形状が不明だが、深さ8cmである。古代瓦、瓦器碗片、土師器皿（21）が出土した。柱穴26は円形で、堀形直径38cm、柱芯直径10cmである。瓦、土師器、瓦器碗の破片が出土している。柱穴27は円形で、堀形直径36cm、柱芯直径14cmである。瓦、土師器、瓦器碗の破片が出土しており、瓦器碗は川越編年IIIの

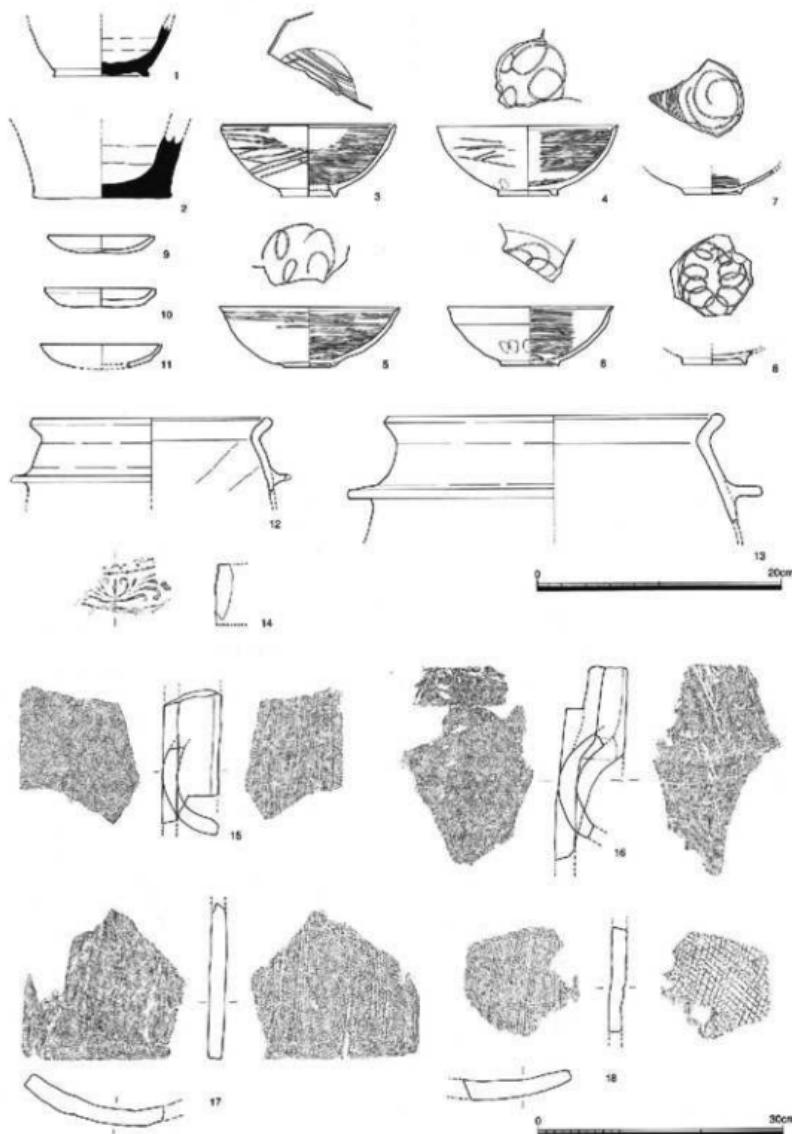


图5 SK 1出土上造物实测图 (1~14:1/4, 15~18:1/6)

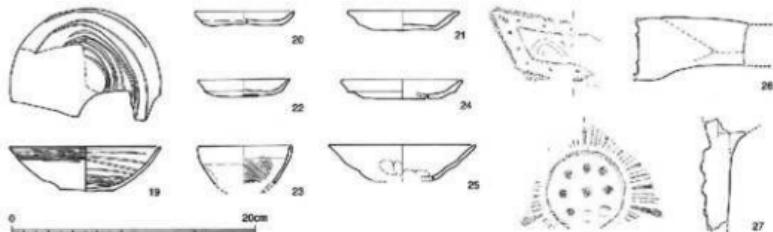


図6 出土遺物実測図 (1/4)

終わり頃にあたる断面三角形のはりつけ高台を持つ小片である。

G区 溝状遺構と土坑を検出した。SK30は東西幅60cm、深さ17cmを測る。瓦、須恵器、土師器皿(22)と菅原編年大和II型の土釜の口縁部分と川越編年IVにあたる小型化し晒文が退化した瓦器椀(23)が出土しており、14世紀の遺構といえる。SK31は楕円形で、東西径38cm、南北径28cm、深さ19cmを測る。古代瓦、埠、須恵器、土師器上釜と土師器皿(24・25)が出土している。SD33・34は検出段階では一本の溝であったが、SD33が新しい2本の溝であることを土層断面で確認した。瓦、須恵器、土師器皿と均整唐草文軒平瓦(26)の破片が出土した。

なお、卑弁蓮華文軒丸瓦(27)は表土掘削時に出土したもので、26とともに片岡王寺に所用された軒瓦であろう。

3まとめ

今回の調査では古代の片岡王寺に関連する遺構は検出されなかった。しかし、片岡王寺跡第1次・第3次調査において古代の掘立柱建物などを確認した成果を参考にすれば、未調査となった中世整地土cの下層には、古代の遺構が存在する可能性は高いといえる。

古代の遺構が検出されなかった反面、柱穴、土坑、溝と数次にわたる整地といった中世遺構を確認した。B区で検出したSK1は遺物の出土状況から廐棄土坑であり、その時期は12世紀後葉-13世紀中葉である。また、E-G区に堆積する中世整地土bには13世紀中葉-末の瓦器椀の破片が含まれ、E-G区の遺構からは13世紀-14世紀代の遺物が出土している。さらに掘削をおこなわなかった中世整地土cも存在する。このことから、調査地付近では13世紀を中心とした時期になんらかの活動がおこなわれていたことが想定できる。

これらの中世遺構は調査地に近接する片岡王寺、達磨寺との関連を考えることができる。『放光寺古今縁起』からは永承元年(1046)の雷火によって金堂、回廊、東大門などが炎上したのを契機に12世紀初めにかけて放光寺が衰退し、復興を企てるものの再建をはたせなかつたことが読みとれる。そして、嘉吉3年(1443)に『放光寺古今縁起』を筆写した災厄による奥書には、応安4年(1371)の金堂の柱立をはじめとした14世紀後半から15世紀前半にかけての復興の様子が記されている。これまでの調査成果から調査地が片岡王寺の寺域にあることを考え合わせれば、今回確認した中世遺構は片岡王寺の復興活動が『放光寺古今縁起』に記されない時期にも続けられていたことを示すものと考えられる。一方、13世紀前半は達磨寺が開基される時期にあたっており、達磨寺の開基にともなって周辺にも開発の手が加わったと考えられる。さらには14世紀初頭の興福寺による焼き討ちから復興にむけた活動の痕跡の可能性もあるだろう。

残念ながら今回確認した中世遺構がどちらの寺院に関わる遺構であるかは現段階では判断することはできないが、今後の周辺の調査によって明らかになっていくことを期待したい。

第3章 舟戸・西岡遺跡第4次発掘調査

1 調査の契機と経過

舟戸・西岡遺跡は王寺町舟戸3丁目に所在する舟戸山と呼ばれる丘陵から河合町西岡地区にかけて広がる遺物散布地であり、石器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、陶器類が採集されている。遺跡が存在する丘陵の北面には大和川が流れおり、周囲への眺望は非常によいものとなっている。1997年、奈良県立橿原考古学研究所が河合町との町境付近の畠地を発掘調査し、弥生後期の円形住居址1棟を検出した。この住居址は直径11~12mに復元できる大型のもので、住居址からは壺、甕、鉢、高杯と石器製作時のサスカイト片などが出土している。この成果によって、現在は丘陵の標高70mを目安にして高地性集落が営まれたことが想定されている（第1次調査）。2001年には河合町教育委員会が遺跡の東側にあたる河合町大輪田で発掘調査をおこない、古墳時代以降奈良時代以前のものと思われる掘立柱建物を検出している（第2次調査）。また、丘陵の最高所では古墳状隆起が確認されている。これまでの調査や遺跡の立地状況から、舟戸・西岡遺跡は弥生時代、古墳時代を経て古代に至るまで大阪と奈良をつなぐ交通の要衝を押さえるための施設が営まれたと想定されている遺跡である。

今回の発掘調査は平成16年度町内遺跡発掘調査事業（範囲確認調査）として王寺町舟戸3丁目4305番1の敷地内で実施した。調査地はすでに造成され平坦地となった土地であるが、住居址が検出された畠地の南～南西側にあたっているため、遺跡の残存状況を確認することを調査目的とした。調査地内に7ヶ所のトレンチを設定し、2005年3月7日～3月28日まで実働14日の調査をおこなった。

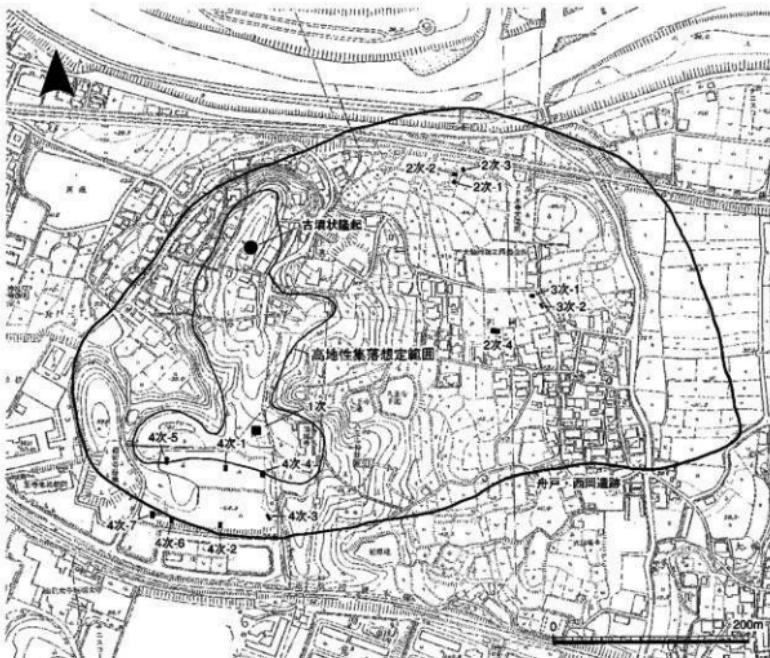


図7 調査位置図 (1/5,000)

2 調査の内容

1 レンチ 15m × 3 m のレンチを設定した。層序は上から暗オリーブ褐色砂質土の表土、明褐色の粘土ブロックを含んだ褐色砂の整地土（厚さ13m）、オリーブ褐色シルト～粗粒砂の地山である。整地土中には花崗岩の大岩があり、破碎された花崗岩片も多数混入している。地山は標高65.4mで検出し、遺構、遺物は認められなかった。

2 レンチ 15m × 3 m のレンチを設定した。層序は上から暗オリーブ褐色土の表土、粘土ブロックを含む黄褐色粘質土の整地土（厚さ18cm）、浅黄色～灰白色のシルト～粗粒砂の地山である。地山は標高64.6mで検出し、遺構、遺物は認められなかった。

3 レンチ 15m × 3 m のレンチを設定した。調査地の東端にあたり、造成前は谷筋で水田が営まれていた場所である。層序は上から灰黄褐色粘質土の表土、明赤褐色と灰白色の粘土ブロックを含む灰オリーブ色と明黄褐色の砂が混在する整地土である。現地表下2.3mまで掘削したが、それ以下も整地土が続いているようである。湧水があり、レンチの崩壊の危険性があるので調査はここで終了した。遺構、遺物は認められなかった。

4 レンチ 3 m × 3 m のレンチを設定した。ここは住居址が検出された畑の南側の谷筋にあたり、造成前には池があった場所である。層序は上から灰褐色土の表土、明黄褐色砂質土、粘土ブロックを含む暗オリーブ灰色砂、暗緑灰色砂が堆積する整地土である。現地表下2.7mまで掘削したがさらに整地土の堆積は続き、地山も池底の堆積土も確認できなかった。整地土の明黄褐色砂質土から弥生土器片、土師器片が出土したが、それより下層でビニル製品などの現代遺物が出土している。

5 レンチ 2 m × 3 m のレンチを設定した。層序は上から暗オリーブ褐色土の表土、黄褐色砂質土の整地土、礫混じりの明褐色砂質土の地山である。地山は標高66.4m、現地表下10cmで検出した。遺構、遺物は認められなかった。

6 レンチ 2 m × 3 m のレンチを設定した。層序は上から暗褐色土の表土、粘土ブロックを含む褐色シルト～粗粒砂、粘土ブロックを含む明褐色砂質土、黄褐色砂質土の整地土、明黄褐色砂質土の地山である。整地土からはプラスチック片が出土した。地山は標高63.3mで検出。遺物は認められなかった。

7 レンチ 3 m × 3 m のレンチを設定した。ここは調査地の西端、造成前は谷筋となっていた場所である。層序は上から褐色土の表土、粘土ブロックを含む黄褐色砂質土、明褐色砂質土と灰オリーブ色粘土が堆積する整地土、木片が多く含むオリーブ灰色と黒色のシルトの池底の堆積土である。整地土からは現代の丸釘、近現代の磁器片、プラスチック片、発泡スチロール片が出土している。現地表下2.5mまで掘削したが、池底の堆積土はさらに下層へ続いており、掘削は危険であるので調査を終えた。

3 まとめ

今回の調査では平坦面を作るために予想以上の大規模な造成が行われていることが判明し、遺跡の存在した痕跡が残っていないことを確認した。しかし、造成前の地形図からはレンチ1、2の位置に丘陵の北側から南へ向かって標高70mの等高線がひかれた尾根がのびていたことが読み取れる。また、造成の手が加わっていない調査地の北側畠地、果樹園周辺の斜面では土器片の散布が認められる。このような状況から、造成前の丘陵上には第1次調査で検出された住居址の関連遺構が広がっていたこと、現在でも丘陵上の開発を受けていない部分には遺構が残っていることが想定できるだろう。

今後も継続して調査をおこない、丘陵上に存在したと思われる弥生後期の高地性集落を明らかにしていくことが必要である。

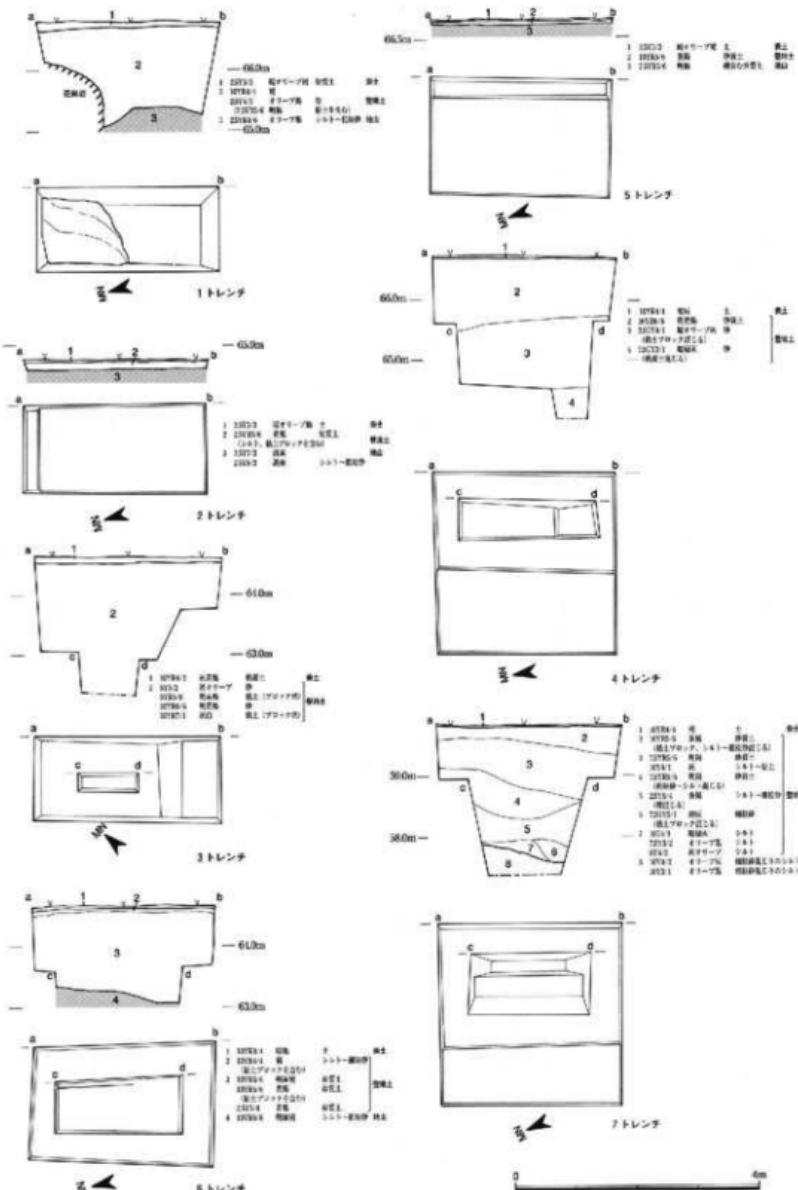


図8 各トレンチ平面図・土層断面図 (1/80)



B区SK1 完橋状況（西から）



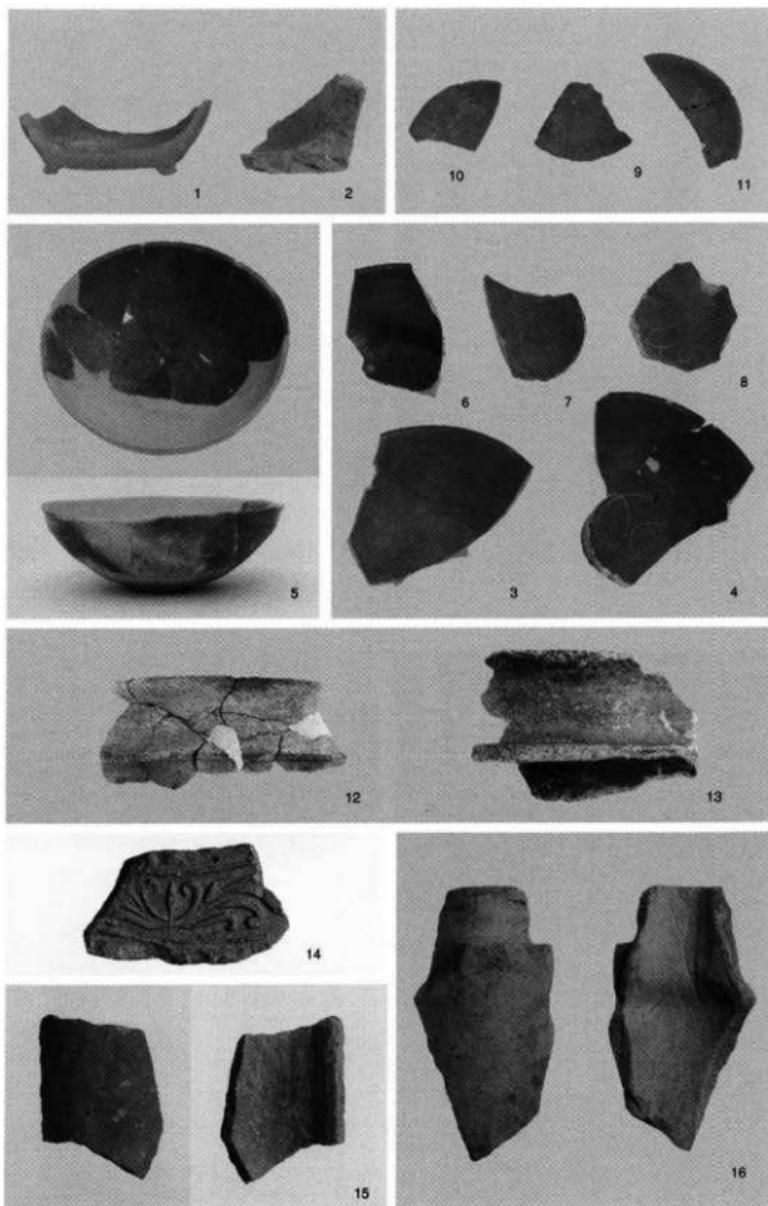
D区道橋検出状況（東から）



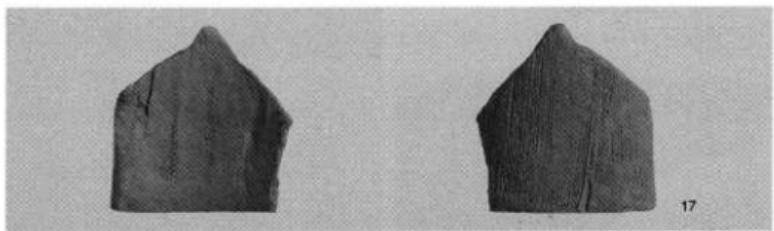
E区道橋完橋状況（西から）



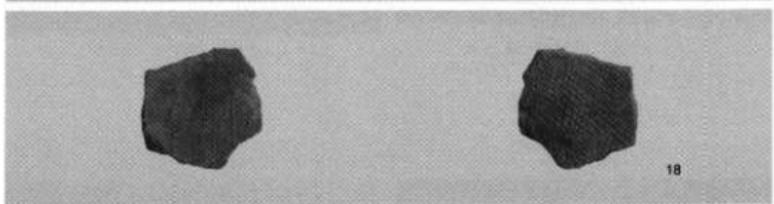
F・G区道橋完橋状況（西から）



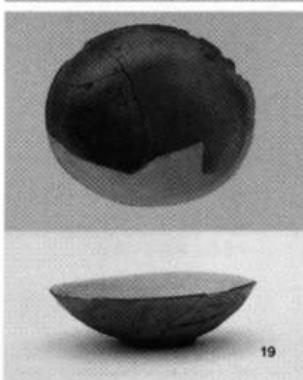
出土遺物



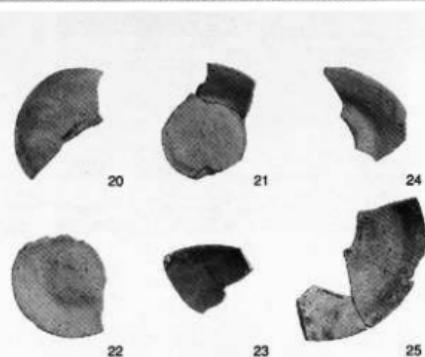
17



18



19



20

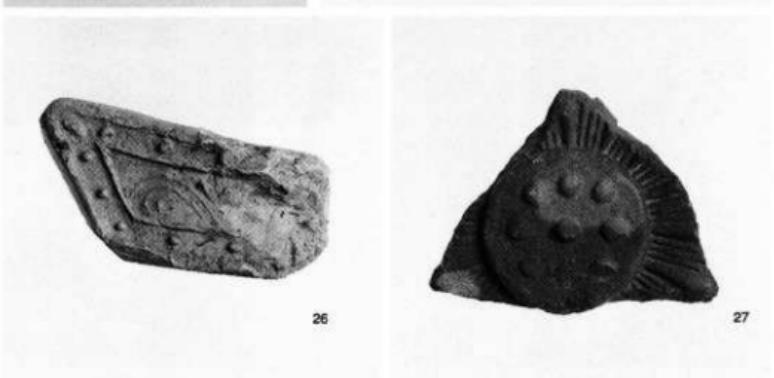
21

24

22

23

25



26

27

出土遺物



1 トレンチ東壁土層断面（西から）



2 トレンチ地山検出状況（南西から）



5 トレンチ地山検出状況（東から）



6 トレンチ東壁土層断面（西から）



3 トレンチ北西壁土層断面
(南東から)



4 トレンチ南壁土層断面（北から）



7 トレンチ東壁上層断面（西から）

報告書抄録

ふりがな	かたおかおうじあとだい2じ、ふなと・にしのおかいせきだい4じ —2004ねんどはくつちょうさほうこくしょ—							
書名	片岡王寺跡第2次、舟戸・西岡遺跡第4次 —2004年度発掘調査報告書—							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	岡島永昌、櫻井恵							
編集機関	王寺町教育委員会							
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号							
発行年月日	平成19(西暦2007)年3月30日							
取扱遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 番号	遺跡 番号					
片岡王寺跡	奈良県 北葛城郡 王寺町 本町1丁目 1698番1	29425	10B 5	34° 35' 22"	135° 42' 20"	2004.07.23.~07.29.	67.5m ²	小学校 グランド 改修
舟戸・西岡 遺跡	奈良県 北葛城郡 王寺町 舟戸3丁目 4305番1	29425	10B 35	34° 35' 27"	135° 42' 53"	2005.03.07.~03.28.	49.5m ²	範囲確認
取扱遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
片岡王寺跡	寺院	古代 中世	廃棄土坑	土師器、須恵器、瓦器、瓦 質土器、陶磁器、軒瓦、瓦				
舟戸・西岡 遺跡	集落	弥生	特になし	特になし				

片岡王寺跡第2次 舟戸・西岡遺跡第4次

—2004年度発掘調査報告書—

王寺町文化財調査報告書 第7集

2007年3月30日

編 集 王寺町教育委員会

発 行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号

印 刷 株式会社 明新社

奈良市京終町3丁目464番地